

うから願はくは此機を外さず益々音楽を盛んにし志氣を鼓舞して彼のストライキ節やホーカイ節の様な亡國的音楽を退治して仕舞ひたいものがあります

音楽界に致したる貢獻

と申す程大きなことでも御座りませぬが當樂器店から出版しましたもの、中で聊か世に形響を及ぼしたものが二つ三つあるのでござります其中で最も著名のものを申し上げます其一が日本俗曲集と申す本です是は洋装二冊物で内容は日本在來の端唄長唄琴唄などの歌曲を西洋樂譜に現はしたものでそれにヴワイオリン、オルガン、尺八などの使用法と簡単な音樂理論とを附したものでありましたものと世間多くの人は此頃まで西洋の音樂と日本の音樂とは別物であつて我歌曲が香譜に載せられやうなごとは少しも考へませず又そんな本は一冊もなかつたのでありますところへ出たのが此本でありまして端唄や長唄が風琴手風琴などで人に習はずして面白く弾けると申すのですからたまりませぬ其流行は忽ちの間に日本全國に廣がりまして結果は非常に西洋樂器の賣行を促し手風琴なども其年よりめつきり輸入額を増大いたしました

ましたまたこのやうに樂器が流布いたしますれば随つて俗曲のみでなく種々の唱歌なども彈奏する人も多くなり唱歌普及の助けにもなつたものでござります又二十七年にはヴワイオリン指南を出だして高尚なる音樂を世に薦めますし二十八年には帝國軍歌を出だして東の大捷軍歌西の帝國軍歌と云はれる程に流布いたしましたして日清戰役當時の敵愾心を喚び起し近く三十三年には鐵道唱歌を發行して海内を風靡致し一時鄙褻の俗歌を御くるに至りましたのは皆さんよく御承知の事ですから申し上げるまでもござりませぬ

茶業部

三木茶業部の創設

三木茶業部の創設 山城の和束茶と申せば外國までも響いた好い茶でござりますが我農業者の附近には澤山それが出來ますので實の山に入りながら手を空しうせんよりは一番之を買ひ込んで外國へ輸出を圖つたらどうであらう、それは屹度面白いに違いないと自問自答の結果が明治二十七年の三月神戸市内海岸通五丁目十九番地に九三三木茶業部として

不意の事變と廢業

現はれました茲に我農部より程遠からぬ所に林平重郎と申しまして幼なき頃より私と親しうして居る人が茶の事に明るいと聞きましてからそれを雇ひ入れて茶業部の支配人といひし山城は申すに及ばず江州伊賀伊勢土州乃至九州地方の茶をも買ひ入れまして外國商館へ賣り込み首尾よく好結果を得ましたならば更に横濱へも支店を設け東西相呼應して大に我製茶貿易を振興させやうといふ意氣込で着々其歩武を進めて参りました

不意の事變と廢業 所が當て事と何とやらは前から外れると云ふ世の例しに漏れず圖らずも俄かに一の障害が起りました折角の計畫も忽ち中途に一頓挫を來しましたそれは何故と申しますと私の股肱とも頼んで居りました支配人が明治二十八年七月一日に突然急病で死去致しましたのでござります時は恰も二番茶の出廻り最中で土藏にも澤山製茶がありました不意の變故に遭遇して一時私も途方に暮れました同業者や手代番頭などは依然繼續を勧めましたれども是は餘程考へ物ぢやと私は思ひましたので繼續することもなく閉店することもなく先づ澤山にある茶を片

別れの盃

端から賣拂ひ貸しのある所は取りて借りの有る方へは拂ひ極めて敏速に極めて正確に其整理を付けましたさうして終に決心しました茶業部廢すべし貿易中止すべし掛持兼業は畢竟身の毒と悟りました併し鳥は立つことも跡は濁すなど云ふ事がある閉店の後に世間の人から後指でもさゝれる様では男子の一分相立たずと考へましたから債權者は七月三十日までには必ず請求あれ而後の申出は敢て關せずといふ意味で新聞に廣告を致して其期日までに悉く仕拂を付けて仕舞ました

別れの盃 翌けて七月三十一日の夜でありましたが是まで使つて來た傭人を悉く諏訪山の吉田樓に招きまして敗軍の將と其幕下と別盃を舉げ敗軍の將は起つて一場の告別演説を致しました

今日は我茶業部解散の結果として皆様に御別れを致さねばならぬ事となりました付きましては今までの御骨折に對しても今少し御馳走もし御禮も申し上げねばならぬ筈ですが御承知の通り俄の營業中止で其損失も七千何百圓といふ數からぬ金額に上る始末でありますから其儀はあしからず御用捨を願ひたうござります只今此に御招き申したのも

實は此くの如き損失の生じました爲めであります斯う申してはちとをかしく聞えませうが其譯は元來三木は茶業に就いては全く素人であるのにかゝる貿易業などを始め萬事僭人などに任せて置いたからよい様に掻き廻され終に失敗に歸したなど世間から批評でも受ける様なことでもありませんと獨り私の不名譽であるのみならず皆さんの信用にも關係を及ぼし履歴も汚れる譯ですから私と皆さんとは少しの隔意もなく快く酒酌みかはして別れたと云ふ事を世間に知らせたいがため今此に告別の宴を催したのでござうか其御積りで私の微衷を看と思うて愉快に飲んで下さい

と言ひ残して別れを告げて歸阪いたしましたとは云ふもの、此度の失敗は寧ろ商業以外の事に原因いたして居るのでござりますから餘り心持がよくはありませぬよつて歸阪しますと直に山城の農学部へ参りまして山紫水明の間に暫し世塵を避け優游自適方めて身心を養ひましたそれから後右の茶業部に従事して居ました人々は大抵それ／＼の處へ就職いたし又私の微衷も永く忘れられずに今日でも尙消息を寄せて來られる方が多

製茶貿易の得

いのです其都度私はうれし涙を零すのです
製茶貿易の得失 其後茶業部の存廢に付きまして種々の勸説を種

種の人から受けました或は彼の店を今一應復業してはどうぢやとか或は信任金を千圓入れて純益は折半に致しませう損が往つたら自分一人で負ひませうとかいや御迷惑は掛けぬから是まで御使になつた九三の商標を借りたといか其他種々の申込がありました私に絶對的に皆之を拒絶して仕舞ひましたそれと申すも第一此製茶貿易といふ者が、まるきり本統の商賣にはなつて居りませぬので何故かと申しますと全體商賣と云ふ物は大概原價が是だけで手数料が幾ら掛つて是だけの利益を得ねばならぬから幾らに價格を定めて賣るといふ事になつてこそ始めて商業の性質が成立つものであります然るに製茶貿易の如きは外國商館へ見本を持つて行つて是なら幾ら是なら幾らといふ風に先方の意向次第で時々の相手を左右されるのでありますから詰まる所自己の意志で賣るといふのではなく外國商館の意志で買はれると云ふ有様でありますさう云ふ商賣の道方では迎も成功すべき筈はござりませぬ尤も古く遺つて居る人は其處を巧

みに切抜けて居ますから好いやうなもの、畢竟現今の有様では格別の利益はないものと断定して差支がない、さう云ふ感念が起つて居る折柄閉店後六十日餘りを経て二十八年十月一日に其茶業部の家屋倉庫が焼失致しましたので、もう是は茶業を止めろと云ふ天の告であらうと思ひまして以來茶業は眞實断念して仕舞ひました

農 業 部

懐かしき故郷

懐かしき故郷 天の原ふりさけ見れば春日なるの歌は人々も御存じの通り昔阿部仲磨が波路へたゝる唐土にゐました折に萬里望郷の念に堪へかねて咏んだ歌ぢやと聞いて居りますが私の故郷は其三笠山から程遠からぬ南山城の和束と申す片田舎でござります遠征萬里の旅ならぬ身も故郷懐かしと思ふ心は仲磨と少しもかはりは致しませぬ西洋の謠にも故郷は第二の我なりとか申しまして如何なる英雄豪傑でも功成り名遂げて後は先づ錦を故郷に飾りたがる所を見ますと故郷ほどよい所はないものと見えます私は固より錦を飾るといふ程の功名も何にもありませんが志



田畑地の購

を遂げねば再び此土地を踏むまいと堅く誓うた一念に勵まされて知らぬ他郷に幾年月の憂き艱難を重ね一心不乱に稼ぎました結果齡三十四五ともなりました頃には手許も少しは裕かになりましたので其生れ故郷を忘れぬ爲め故郷の人に忘れぬ爲め一つには又年老いたまひし養母の閑居に充てん爲め且つは殖産事業を奨励して國益の一端ともなさん爲め茲に農業部なるものを郷地に設けんものと志しました

田畑地の購入

そこで私は第一に田畑地の購入を明治二十年一月頃から始めました田地の買入価格は米一石に付き五圓と云ふ標準で割出しましたが其年の秋に收入れた米は一石三圓八十錢の相場でありましたので大きに思はくが違ひましたなれどもそれには構はず買進しました翌年の出来秋はどうかと申すと一石四圓位で矢張見込が違ひますから一時は一寸首を傾けました何が何の是しきに躊躇してはと思ひ返して初念を續けました小作人から取り入れる米は始めの程は親戚渡邊儀左衛門殿の土蔵に預けて置きましたが段々殖えて参りますので新に土蔵建築の必要が起りまして之に伴ふ家屋も建てねばなりません又其地面も探定せねば

ならぬ事になりました其時私は情々考へますに自分は幼少から大阪の主人に人ご爲り後その家の養子となつたものでありますから今自分の郷里で田地を買うたり家倉を建てたりするに口さがなき世間の人達があれは養家先の金を自分の郷里へ持ち運んだと誹る者が無いとも限られぬそれでは自分の本意に背く譯で信用上に少からぬ關係を及ぼす事ぢやと考へましたから養母にも篤と意中を打ち明けてまして兩人連れ立つて山城へ實地の檢分に参りましたのは明治二十一年十二月の事でござりました幸ひ親族儀左衛門殿の隣に渡邊秀太郎殿といふ人の所有畑地で適當な地所を見當てましたが儀左衛門殿は隣家同志でよそさまの寶物を買つて下さいなど、無禮な事を言うて行き難いと申さるゝので其隣家の渡邊彌四郎といふ方を頼んで秀太郎殿方へ参つて貰ひました所が意外に直段が高いので一寸二の足を踏み掛けましたが、少しくらゐ直を高く買つても家倉地面などは末永く持つ物で後には安い物になるであらうから一層のこと買ひ取つたがよからうと養母が申されましたのでその言葉に従ひ早速これを求めることに致しました

倉庫家屋の新築と工事の困難

倉庫家屋の新築と工事の困難 あくれば二十二年いよ／＼農部の新築工事を起しまして先づ第一着に倉庫を一株建築いたし次に家屋の建築に取り掛りました石工、大工、左官、瓦葺などは山城奈良大阪地方から呼び寄せまして、それ／＼工事を進ませましたが何分田舎の事でござりますから種々の不便や困難が意外に多く是には全く弱りました早い一例が附近の土地は森林で取り巻いて居りますから木材は幾らでも自由になりそうに考へられますれど中々さうは参りませぬので内造作の木材などは残らず大阪から積み上げたのでござりませぬ時としては煉瓦が入るとか釘が不足ぢやとか銼が入るとか申せば其都度々々に人足を一二里の所まで走しても品物が無い何でも大阪へ注文せねばなりません明治二十四年の春にも大阪本店の西の濱へ三十石船を一艘雇うて來まして、それに一杯雜品を積み入れて登した事もあり又八軒家の河徳の扱ひ今橋東詰の平井、回漕店の扱ひで相樂郡瓶原村大字井の平尾の村井伊八揚げにて凡そ何百回運搬しましたやら敷が知れぬ位それでも猶追付かないで一寸左官が土を煉るとか人足が漆喰を打つとかするにも先づ土煉り箱や漆叩から製造して

工事の落成と 大地震

掛らねばならず又大阪へ注文した品も今時と違ひまして催促するにも電信はなし汽車便はなし通運便も小包郵便もない時ですから郵便で早く来て十日遅い時は二十日以上もか、らねば届きませぬ従つて作事方の手違ひとなつて萬事が抄取らず蓄へてある物は餘つて品の稀な物が不足を告げるといふ様な調子でありますからたまりませぬまだその上に田舎の職人の不規律な事と申したらお話にも何にもなりません、二時間毎に煙草の休みをする中には二時間以上晝寝をする奴もある實に亂雑極まる人々の寄合でさういふ人々を使はねばならぬ私こそよい災難でありましたそれから今一つ困りましたのは植木の運搬で中にも大木の荷嵩物などには一方ならぬ入費と手数が掛りまして大きに頭を悩めたのでござります

工事の落成と大地震 かやうな譯で田舎は總ての物事が不便勝で痒い處に手が届かぬ事のみ多く家屋倉庫の設計は申すまでもなく泉水木石の配置石垣の積みやう庭木の入手に至るまで一々皆私が差圖をせねばなりませんので一方ならず骨を折りました末に漸く工事の落成を告げましたから近隣故舊の方々や大阪の親族友人などを招きまして新築落成の

農業部の支配 人及び留守居

祝宴を開き主客大きに歡を催うして農業部萬歳を祝しましたのは二十四年の九月でござりました其後一月ばかり立ちまして十月二十八日は濃尾地方に類ひ罕なる震災のあつた日でござります其時私は大阪の自宅に居りまして奥の座敷で前栽を眺めて居りました所か突然劇しき震動が起つたかと思ふと庭に据えてありました一丈ばかりの石燈籠がばたりと倒れて仕舞ひました、すは地震よと叫びも敢へず一目散に二階目掛けて駆けあがり屋根へ飛び上りましたのは自分ながらもどうして體が動いたか分りませぬがもしや家が潰れて下敷にでもなつては困ると考へたのかぞれで私は屋根へ飛び上ると直ぐに農業部の事を思ひました幾ら丈夫に出来て居ても高い崖の上にはぼかんど一軒立つて居るのですから助かるまいと心配致しましたが後に行つて見ますれば唯壁に龜裂を生じた位で格別の損害はありませぬので始めて胸を撫でおろしました

農業部の支配人及び留守居 地震には何時もごた／＼が付き物ですが其後間もなく此農業部の事に付きまして郷里の親類と一條の紛議が生じ面白からぬ感情が起りましたから漸然此農業部を廢して仕舞は

うかごも思ひましたが待て暫しと思ひ返し質家松田貞次郎立會の上渡邊儀左衛門殿と一條の契約を取り結びまして事落着いたしました此兩家は共に農業部から一町ばかり西と東に別れた所にありますので監督方萬端の便利も宜しうござりますから其後私の心では渡邊氏を其支配人松田氏を副支配人といふ積りで萬事御世話を戴いて居るのでござります又その留守居番には中島すまといふ私と同年の婦人を大阪から連れて参りましたが此人は別家中井善吉の姉でござりまして農業部開設以來本年二月二十六日に至るまで十年一日の如く勤続しまして當節稀なる正直者平素熱心な本願寺信仰でござりました所が此邊は總べて真言宗ばかりでござりますから出入の者等と宗旨の話でもすると何時も南無阿彌陀と遍照金剛が衝突しますので頑固の婆さん面影らして詰らんくで居た様子に見えましたそれが爲めで、もござりますか是までに遣りました給金や貰ひ溜めの金やらを引き纏め二十四拜を致したいからと申しまして暇を乞ひ本年の春旅立を致しまして此頃は何でも越後の新潟近傍に巡拜を致して居るさうでござります其跡へは本年二月二十日に竹田貞子と申す者が

其末子を一人連れまして留守居に代りましたが仔細あつて五月十四日に暇を出し今度は堺市寺地町西三丁三木伊兵衛といふ人と其女房のくすと申すものと兩人を其後代りに頼みまして唯今も篤實に勤めて居るのでござります

おてんの園と
四近の名勝と

おてんの園と四近の名勝 和東の里は元弘蒙塵のみぎり後醍醐帝が笠置を御逃れになつて御足を御向け遊ばしたところとも申し傳へました農業部の後ろに立ち並んで居ります一帯の岡林にはもと天皇さま(神の名が鎮座まし)とたいよ事でかたぐ土地の人々は此所を指して「おてんの」と稱へて居りますそれに因みまして私は此農業部の一廓内をおてんの園と名づけたのでござりますこ、より南の方三里には奈良をひかへ大阪へは西南十里京都へは西北十里ありまして附近に名勝の地多く四時の眺めも中々宜しい上に土地閑静で俗塵到らず空氣が清うて健康に適して居りますから私も家の務めの暇まゝ心ふさぎて物思はしき折ふしは日頃親しき友達などと此處へ参りまして遊びますのを此上もない樂しみとして居るのでござります今年夏もまばらく茲に暑さを避けて居り

ますと名古屋の知人が一人尋ねて参りまして二三日遊んで行きました。が當時の有様を述べられまして三日の清遊と題する文章を送られました。文中に此おてんの園や近所の名勝一斑を伺ふに足る所もござりますから管しい話を止めてそれをお目にかける事に致します。

三日の清遊

三日の清遊

來年の夏には必らず我おてんの園へ遊びに来よと玉淵翁が言はれしことを忘るゝともなく忘れぬけるを今日此頃の暑さに不圖思ひ出で、日頃の御無沙汰申譯無之候暑く相成候程に涼しい處へ遊びに行かばやと存候近きがうちにおてんの園へ参るべく候ゆる二三日の假の宿御願申上候とばかり申送りて今年八月の六日といふに朝まだき流車に乗りて名古屋を出立ち其日午過ぐる頃ほひ加茂の驛へと着きにける流車を下りて豫ねて聞き置ける言葉に従ひ青田の間をうね／＼と曲れる一筋を下足に任せて行くこと里餘暑き日影を一盞の菅笠に蔽へて餘念もなく田草を取り居れる里の娘に聊か物を尋ねたき事の候此村におてんの園と申すは何れの處にやと問いつれば彼の小高き崖の上に森の見ゆる所に